

一書長卷名曰國朝文獻卷

一昨和元年田五因志公出遊者
為書之矣

[illegible]

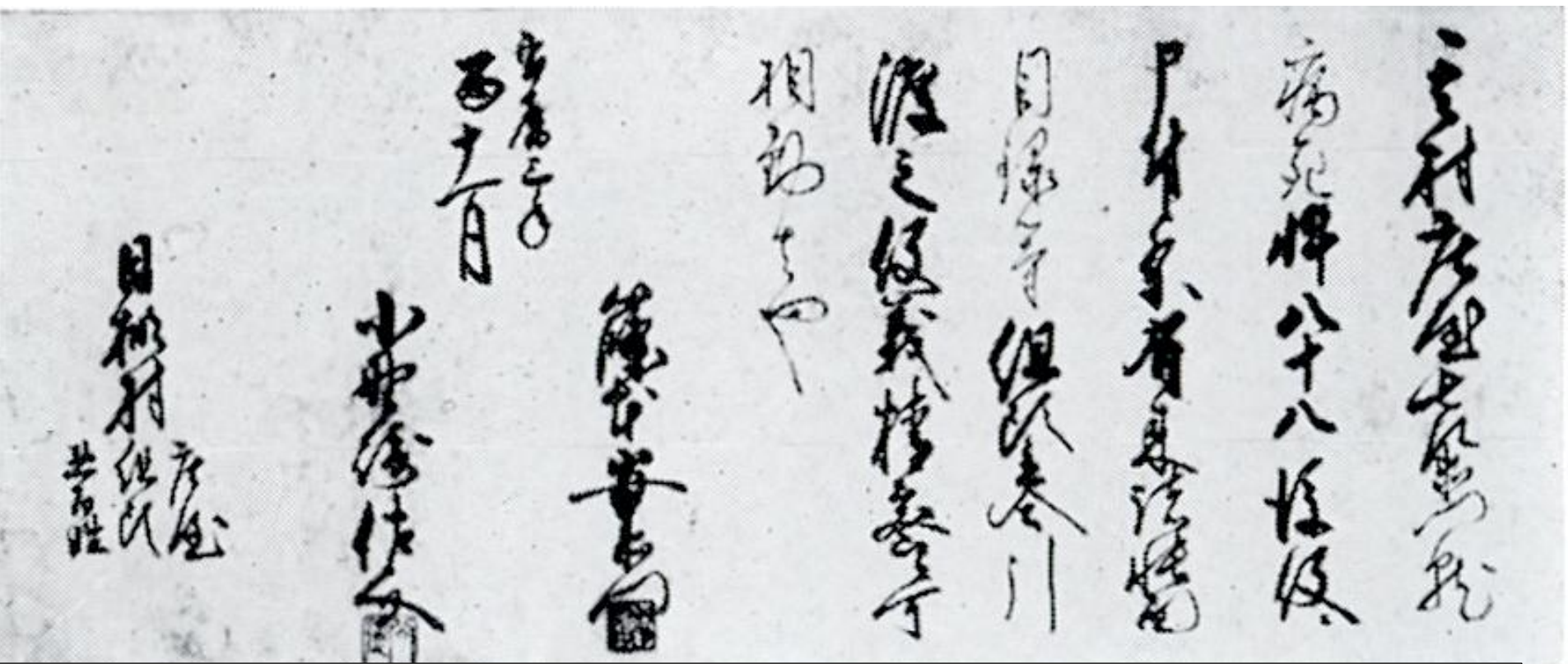
寶曆二年八月廿五日
 寶曆二年八月廿五日
 寶曆二年八月廿五日

仁礼村
中込村
小坂村
大坂村
仙伝村

只今と役所肝要
お唱書とて此下
中込、小坂、大坂、
お寺、中込、小坂、
大坂、お留交、
取、世々
仁礼村、中込村、
小坂村、大坂村、
お寺、中込、小坂、
大坂、お留交、
取、世々

村々肝要

世々此と通達を、
相承せしめ、
以後、此と役目之職
先、自今、大、有、
相、お留交、
有、之、
言、
通、大、小、
お、
後、
常、
不、



其村庄屋七左衛門就

病死、倅八十八跡役に

申付候条、有来諸帳面

目録等、組頭立合、引

渡之役義精密に可

相勤者也

藤本安衛門 印

宝曆三年
酉十一月

小野崎佐人

目■村

庄屋
組頭
惣百姓

急ぎ書附申願書より

持主 浅田家系三六

むら市村

信



浅田家系

新三郎

右者高市村在る園主病死後跡はくもの
 人跡跡多様押致存立をて古高村一統
 襲継と大信代故人柄貫科筆筆未
 申意はは者由在る同人 古高村は 作有
 は高殿のいれも願うに高市村は高市村
 中用殿より村柄由在る古信代末老の
 有は高市村は 由在る高市村組長
 高市村は高市村は 高市村は 高市村は
 有は高市村は 高市村は 高市村は
 川原高市村は 高市村は 高市村は
 高市村は 高市村は 高市村は
 村中一統は 高市村は 高市村は
 村方一統より 願書を 高市村は
 由在る高市村は 高市村は 高市村は
 高市村は 高市村は 高市村は
 高市村は 高市村は 高市村は

九月

田原市村

高市村

善平

日

高市村

善平